国際保健政策サマープログラム2010　報告書

Global Health Policy Summer Program 2010 Report

日本医療政策機構
Health Policy Institute, Japan

東京大学
THE UNIVERSITY OF TOKYO

目次

1. 「国際保健政策サマープログラム」とは 2
2. 「国際保健政策サマープログラム」概要 3
3. 政策提言まとめ 8
4. 講師とメンターのご紹介 9
5. 参加者一覧 10
6. サマープログラムを終えて 11

「国際保健政策サマープログラム」とは

地球規模課題の中でも重要な課題のひとつである国際保健は、途上国で貧困や疾病により失われる命を削減することを目的としている。近年では、ODA資金を拠出する政府機関だけでなく、ビル＆メリンダ・ゲイツ財団や世界エイズ・結核・マラリア対策基金をはじめ、市民社会や民間企業が様々なかたちで国際保健分野に関わるようになっている。急速なグローバル化に伴い国際保健の重要性がますます高まる中、当プログラムでは、この分野に関心のある様々なバックグラウンドをもつ学生が結集し、日本の国際保健政策における重要課題を議論し、政策提言をまとめた。国際保健に対する問題意識を、いかに具体的な政策につなげ、世界に対してより大きなインパクトを与えることができるのか。世界のために語り合ったこの夏の経験を活かし、従来のキャリア構築の枠を超えた、地球規模課題の解決に貢献するグローバルな人材として、世界に羽ばたくことが期待される。

プログラムの流れ

多様なバックグラウンドをもつ学生に対し、包括的かつ先端的な学びの場を提供すべく、以下の流れでプログラムが運営された。

【プログラム内容】

グローバルなキャリアに求められるスキル研修

国際保健政策の概論についての講義や、戦略コンサルタントや米国のビジネススクールからの講師による問題解決フレームワークやコミュニケーション・スキル研修により、政策提言作成の基礎を身につける。

第一線で活躍する講師によるレクチャー

国際保健に取組む、政府、アカデミア、シビル・ソサエティーなどの最前線で活躍するリーダーからの講義を受け、現在の国際保健分野における課題を把握する。

政策提言作成

収集した情報をもとに、専門家の監修の下、実際の社会にインパクトをもたらし得る政策提言を作成する。

政策提言発表

国際保健課題に取組む国会議員や各種メディアを招待した発表会で政策提言を発表。

【本年のテーマ】

学生は4グループに分かれ、以下2点のテーマをそれぞれ2班が取り組み、政策提言を作成した。

1. 国際保健政策を広く国民に普及啓発するためのアドボカシー活動構築のあり方
2. 国際保健政策分野でグローバルに活躍できる人材を日本から輩出するために求められるアクション

【開催期間】

2010年7月25日（日）～8月1日（日）

【開催場所】

東京大学本郷キャンパス

【参加者】

大学、大学院に所属する学生（海外の大学、大学院に所属あるいは海外の大学院への進学が決まっている学生、留学生含む。）

【主催】

特定非営利活動法人 日本医療政策機構／東京大学大学院 医学系研究科 国際保健政策学教室

「国際保健政策サマープログラム」概要

（敬称略）

7月25日（日）

オリエンテーション1 /アイスブレーキングセッション

日本医療政策機構事務局/渋谷 健司（東京大学大学院 医学系研究科 国際保健政策学教室 教授）

参加者の顔合わせを行い、本プログラムの意義、プログラムの流れ等の説明を行った。参加者は事前課題を踏まえ、本プログラム参加にあたっての各自の問題意識の所在について述べ、各自が本プログラムを通じて何を得たいのかを確認した。続いて、8日間ともに政策提言作成に取組む各班のメンバーと政策提言テーマの発表を行い、どのような姿勢で各カリキュラムに取組み、政策提言を作り上げるかを共有した。

問題解決手法

山崎 繭加（ハーバード・ビジネス・スクール 日本リサーチ・センター シニア・リサーチ・アソシエイト）

政策提言作成に向けての思考プロセスを学ぶ目的で、プログラムの初日に行った当講義では、参加者がグループに分かれて演習問題に取り組んだ。ロジックツリー、イシューツリーといった概念で、論理的に議論を展開する手法を学び、課題分析、現状理解、打ち手の検討、提言・実行戦略といった一連の問題解決プロセスについて演習を重ねた。その後8日間のプログラム中、参加者は当講義によって得られた問題解決手法の基本スキルに頻繁に立ち返り、ロジックに基づいた視点からの議論を試みた。

政策提言作成プロセス / 政策提言作成ガイドライン

坂野 嘉郎（JPモルガン証券株式会社）

乗竹 亮治（特定非営利活動法人 日本医療政策機構 マネジャー）

本講義では、医療政策の実例をみることで、現在の政策形成プロセスが、これまでの限られた関係者によるものから、限られた財源、統治機構改革、情報化社会などの理由により、国民世論を巻き込んだマルチステークホルダーの政策形成プロセスへ変容していることが説明された。その上で、今回の政策提言作成においても多様なステークホルダーによる講義を受け、課題を多角的にとらえた上で、問題解決手法を用いてテーマを深堀し、ロジックに基づいた政策提言を作るプロセスの確認を行った。

7月26日（月）

オリエンテーション2　グローバルヘルス（国際保健）

杉山　晴子　（特定非営利活動法人 日本医療政策機構 アソシエイト）

多様なバックグラウンドをもつ参加者全員が国際保健の基礎知識を習得することを目的とし、国際保健のグローバルヘルスの概念、現状と課題、国際社会の取組み等の概略が説明された。特に、近年、保健分野における民間資金が著しく伸び、財団、企業、NGO等の民間のアクターがより大きな役割を担うようになっていること、今後は多様なアクター間がパートナーシップを組み、より効率的、効果的な取組みが求められていることが語られた。

国際保健の潮流

黒川 清（特定非営利活動法人 日本医療政策機構 代表理事）

英語で行われた本講義は、初めに「なぜ国際保健に取組む必要があるのか」という問いが参加者に投げかけられ、ディスカッション形式で進められた。国際社会における日本の立ち位置、日本にある技術や革新的な発想を用いて開発途上国に将来のパートナーをつくる意義、マルチステークホルダーでの取組みの重要性等がインタラクティブに議論され、参加者は幅広い視点から国際保健を捉える機会を得た。また世界を舞台に活躍することを目指す参加者に向けて、学生のうちに海外に行き、知識・経験を積むとともに、世界中に個人ベースのネットワークをつくることの重要性が語られた。

（敬称略）

国際保健政策概論
渋谷 健司（同上）
地球規模課題としての保健問題が、外交、貿易、ビジネスの最前線の課題として捉えられている現状、近年の主要プレーヤーの変遷、国際保健における主な論点が、数値化されたファクトシートとともに紹介された。参加者はデータを見ながら国際保健課題の現状及び課題を定量的に把握し、エビデンスに基づいた議論を展開することの重要性を共有した。また、日英交えての双方向型の講義がなされ、国際舞台では欠かせない、英語での議論を体得する場となった。

我が国による国際保健課題への貢献～新保健政策の策定に向けて～
清水 彩子（外務省 国際協力局 専門機関室 外務事務官 国際保健関係機関担当）
本講義では、政府開発援助（ODA）の概要が説明され、保健課題は地球規模課題であると同時に、重要な外交課題であるという認識が共有された。特に、現場での効果的取組と国際舞台での政策発信の両面を、外務省が強化していく考えであることが強調され、国際保健を巡る現状に即した我が国の新保健政策のコンセプトを作りの必要性が語られた。参加者は、政策提言作成に向けて、国際保健分野における日本政府の強み、及び他ステークホルダーとの協力により更なる貢献が期待されている現状を理解した。

7月27日（火）

プレゼンテーション、コミュニケーションスキル
山崎 繭加（同上）
プログラム最終日の政策提言発表会に向けたプレゼンテーションスキルの習得を目的とした本講義では、国際保健課題の現状と課題について短時間でまとめ、発表するというグループ演習が行われた。参加者はプレゼンテーションの組立て、スライドの作り方、発表方法等のプレゼンテーションの基本スキルを学んだ。インタビューやビジネスレターについても触れた後、「伝えたい気持ちが大事」というかたちで締めくくられた本講義では、参加者は単なるスキルにとどまらないコミュニケーションのあり方について学んだ。

世界の開発課題と日本の役割
谷口 和繁（世界銀行 駐日特別代表）
人口推計、巨額の債務残高等、日本のおかれた現状把握が共有され、国際社会で生き残るためには国境を越えた課題にクロス・セクターで取組み、世界とパートナーシップを組むことの重要性が語られた。また参加者が大局的視野で国際課題を捉えることの重要性が強調された。世界銀行の第二の資金供与国である日本が、開発問題をどのように捉え、今後どのように取り組むべきか、本講義を通じて、世界の中の日本という視点で、国際保健を含む開発問題を考える機会となった。

国際NGO、JOICFPのアドボカシー活動
石井 澄江（財団法人 家族計画国際協力財団（JOICFP） 常任理事・事務局長）
本講義では、国際NGOとして国内外で活動展開を行うジョイセフの講義を通じ、今回の政策提言テーマのひとつであるアドボカシー活動の現場とそのプロセスについて理解を深めた。世界の市民団体・組織、その他ステークホルダーと連携や折衝を重ね、声をひとつにして訴えることにより、国連の決定事項さえ変えることができるという実例を通じ、マルチステークホルダー間や同一ステークホルダー内でのコンセンサスビルディングの重要性と、それを可能とするアドボカシー活動の必要性を学ぶ機会となった。

Global Corporate Responsibility
Randall N. Hyer（M.D., Ph.D., M.P.H. Regional Director of Medical Affairs, Vaccines, Banyu Pharmaceutical Co., Ltd.）
本講義は、一層主要な役割を果たしつつある民間企業による国際保健の取組みの事例紹介として、国際保健における企業CSRについて学ぶことを目的として行われた。MSD(Merck Sharp & Dohme)の起業精神に即して行っている、抗エイズ薬や風土病の治療薬の無償給付やワクチンプログラムについて語られた。自社の強みを活かしたCSR活動の展開を通して、持続可能な開発と経済合理性の一致について、その可能性を探る上での具体例を学ぶ機会となった。

7月28日（水）

住友化学のオリセットネット事業を通じたアフリカ支援

西本 麗（住友化学株式会社 執行役員 農業化学業務室 アグロ事業部・国際アグロ事業部 ベクターコントロール事業部担当）
水野 達男（住友化学株式会社 ベクターコントロール事業部 担当）

国際保健への取組みで世界的に知られる住友化学株式会社のオリセットネット事業展開についての本講義では、住友化学が「自利利他公私一如」の事業精神のもと、国際機関やNGO、企業、途上国政府など、様々な機関・団体と連携し、支援事業を展開していることが語られた。住友化学が開発したオリセットネットは防虫効果が5年以上持続し、経済的かつ効果的に、マラリアを媒介する蚊から身を守ることができるが、その生産技術を無償供与してタンザニアに合弁会社を設立し、現地の雇用創出や経済発展にも貢献している点が説明された。参加者は、営利事業がもたらす単なる支援にとどまらない持続可能な開発の可能性について考える機会を得た。

国際保健の現在・過去・未来～日本の次世代国際保健戦略を考える～

井上 肇（千葉県健康福祉部 理事）

国際保健を巡る歴史的背景、国際保健分野における日本の現状での立ち位置が紹介され、日本に比較優位のある分野に注力した、日本の次世代国際保健戦略について考えた。 途上国における疫学的状況がMDGs（母子保健・感染症）から非感染症へ、さらには退行性疾患へ変化していくことを念頭においた政策展開の必要性、また健康保健、介護保険制度等の制度モデルの提供や、ビジネスを通じた日本に知見のある領域での関与の可能性等が語られた。本講義はプログラム中盤において、参加者のこれまでの既成概念をあらためて問い直し、国際保健政策のあり方を再考する機会となった。

政策提言の現場～Patient Advocacyの視点から～

乗竹 亮治（同上）

具体的事例を通じて「政策提言」への理解深めることを目的として行った本講義では、がん対策推進に向けた患者アドボカシーの具体例が紹介された。政策決定に際して、患者の意見を取り込みつつも、立法府、行政府、メディア、企業/民間、医療従事者の各ステークホルダーが対策に共に取組む六位一体モデルが紹介され、マルチステークホルダーで課題解決に当たることの重要性が議論された。

国際保健分野におけるJICAの取組み

渡邊 学（独立行政法人 国際協力機構 人間開発部 保健第一グループ長）

本講義では、人間の安全保障、ミレニアム開発目標、キャパシティ・ディベロップメントにおける日本の協力という3つのキーワードに沿って、求められる国際協力のあり方について考えた。現地の写真を見ながらの双方向型の講義を通じ、国際協力を行う上で、トップダウンとボトムアップの双方のアプローチを通じて開発途上国の自立発展性を高めることができる、との認識を深めた。最後になぜ国際協力をするのか、について参加者が一人ずつ発言し、それぞれの経験に基づく、国際協力を志す動機、想いを知る機会となった。

ペシャワール会の活動

福元 満治（ペシャワール会 事務局長（広報担当理事））

医療活動を中心に活動を始め、現在は水利事業を含めた総合的農村復興事業「緑の大地計画」を推進しているペシャワール会の活動について、多数の現場のスライドをもとに議論が展開された。参加者は現場に寄り添い、コミュニティとの協働を通じて生活基盤全体の改善を進める活動から、キャパシティ・ディベロップメントのあり方について理解を深めた。また、そのペシャワール会の活動資金は寄付によって賄われており、着実な活動、報告が多数の人の継続した支援につながることが強調された。

7月29日（木）

世界と日本の援助潮流

荒木 光弥（株式会社国際開発ジャーナル社 代表取締役・主幹）

約40年にわたり「国際開発ジャーナル」を発刊している国際開発ジャーナル社の荒木氏を迎えた本講義では、世界と日本の援助潮流の変遷、また国際協力の普及啓発の現状と課題について、メディアの視点が紹介された。参加者は、世界の勢力図の変遷に伴うBOPビジネスをはじめとする新たな開発支援のあり方を通じ、開発と経済の一貫性について考え、また国際保健課題の普及啓発に向けての示唆を得た。

地域の中で命の格差に取組む

沢田 貴志（特定非営利活動法人 シェア＝国際保健協力市民の会 副代表理事）

沢田氏の活動経験に基づいたインドネシアの保健事情、及びシェア＝国際保健協力市民の会のタイや南アフリカ等のエイズ対策について具体的事例が紹介された。地域の人が主体となることで、持続的な取組みが可能となることを学んだ。また、シェアは国外のみならず国内における在日外国人支援も行っており、国際保健を途上国の問題ではなく、国内の身近な事例として捉える機会を得た。

ご挨拶

西村 智奈美（民主党衆議院議員/外務大臣政務官）

気候変動、貧困、エネルギー等の国境を越えた課題に対し、日本が国際社会の一員として、リーダーシップを発揮し、継続的に貢献することの重要性が語られた。限りある資金をいかに有効に活用し、課題を解決していくか、そのためには、国際感覚をもち、多様なステークホルダーの調整、協力ができる人材養成の必要性が強調された。政策立案者との質疑応答の機会を得て、参加者は、現実に則した政策提言作成に向けての示唆を得た。

CSRと国際保健医療

金田 晃一（武田薬品工業株式会社 コーポレート・コミュニケーション部 シニアマネジャー）

本講義ではCSRの一環として、「世界エイズ・結核・マラリア対策基金」を通じ、アフリカにおける保健医療人材の育成・強化をはかる寄付プログラム「タケダ・イニシアティブ」を推進している武田薬品工業の取組みについて伺った。参加者は企業におけるCSR活動の位置づけ、また今後の発展可能性を維持するための戦略を共有した。持続可能な企業と持続可能な社会は相関関係にあり、NGOや国際機関、政府等のパートナーとの連携のもと、企業と市民社会の双方の取組みにより、社会課題が改善されることを理解する機会となった。

キャリアナイト

「国際保健政策サマープログラム」参加者が、グローバルな活躍をしている若手やミドルキャリアの先輩の体験談を聴き、国際的なキャリアパスを描く際の心構え、参考情報及びネットワークを得る機会を創出することを目的とし、キャリアナイトを実施した。

＜パネリスト＞
金森 サヤ子（外務省国際協力局 地球規模課題総括課 外務事務官）
金田 晃一（同上）
金平 直人（ソケット 代表）
諏訪 理（独立行政法人 国際協力機構気候変動対策室）

（敬称略）

7月30日（金）

国際保健政策とユニセフの活動

平林 国彦（国際連合児童基金東京事務所 代表）

ユニセフという国際保健分野において一翼を占める国際機関の活動体系を知ることで、国際保健をグローバルなアクターの視点から捉え直した。さらには、平林氏自身の国際保健に関わるようになった経緯、体験が共有され、人材養成に際するキャリア構築の示唆を得ることとなった。国際社会の安定のために日本が貢献することが、ひいては自国の安全を守ることになる、という国際的文脈と国内的文脈が相互互恵関係にあることが、参加者に共有された。

7月31日（土）

政策提言作成・中間発表会

各班に分かれ、政策提言作成に取組んだ。中間発表会にて本番同様に発表を行い、メンターより、論理性、実現可能性、プレゼンテーション法等について助言を得る機会を設けた。

8月1日（日）

＜発表会＞

プログラムの政策提言作成プロセスに沿い、スキル研修、分野横断的な講師による講義、そして班ごとの議論のプロセスを経て、各班が政策提言をまとめ、政策立案者や講師から講評を得た。

時間：10:00-12:00
会場：東京大学大学院医学系研究科教育研究棟14階　鉄門講堂
講評者（敬称略）：
逢沢 一郎　（ 自由民主党 衆議院議員）
川田 龍平　（みんなの党 参議院議員）
渋谷 健司　東京大学大学院 医学系研究科 国際保健政策学教室 教授
谷口 和繁　世界銀行 駐日特別代表

式次第

10:00	開会
10:10	衆議院議員　逢沢一郎先生によるメッセージ
10:20	政策提言発表及び参加者、講師からのコメント（20分×4班）
11:40	参議院議員　川田龍平先生によるメッセージ
11:50	コメント／総括 渋谷健司（東京大学大学院 医学系研究科 国際保健政策学教室 教授） 特定非営利活動法人 日本医療政策機構
12:00	閉会

＜修了式＞

時間：12:00-12:30
会場：東京大学大学院医学系研究科教育研究棟14階　鉄門講堂

式次第

12:00-12:20	修了証書授与
12:20-12:30	総括
12:30	閉会

政策提言まとめ

分野横断的なステークホルダーによるレクチャーによる多角的な視座の獲得を経て、各班は、官民パートナーシップや多ステークホルダーによる連携に注目をした政策提言を発表した。各班の政策提言では、地球規模の課題解決に向けた各ステークホルダーの強みを活かした連携体制が、途上国の健康課題の解決、ひいては国際社会における日本の安全につながることが強調された。

テーマ1 「国際保健政策を広く国民に普及啓発するためのアドボカシー活動構築のあり方 」

A班

発表要旨

「NEGIイニシアチブ（Newly Established Global Initiative）」の名のもと、日本政府が健診を通じて日本と開発途上国双方の健康増進を図るメカニズム「健診 For Two」を導入し、日本国民に国際保健政策の普及啓発を広く行う。

講評

「なぜ日本が国際保健に取組むのか」というロジックが明確に説明された。「会社帰り健診」等のサービスを受ける時、途上国の誰かの健康に役立つという意識を醸成でき、途上国の問題を自分の問題として考えるよう促すアドボカシー活動としても興味深い。

B班

発表要旨

企業の国際保健活動への取組みを助成等の政策で推奨し、経済活動を通じて持続可能なかたちで日本国民に国際保健への理解が波及する仕組みを構築する。売上の一部を途上国に寄付するキャンペーン展開、途上国向け商品の展開等が対象となる。

講評

国際保健のアドボカシー活動を継続的に行う上で、企業と一般市民が果たし得る役割の大きさに着目し、課題の現状分析、政策案、実施戦略まで丁寧に構築した発表であった。

テーマ2 「国際保健政策分野でグローバルに活躍できる人材を日本から輩出するために求められるアクション」

C班

発表要旨

多ステークホルダーが結集し、国際保健分野での日本の政策提言能力の強化、教育、人材交流を行うグローバル・ヘルス・シンクタンクを政府主導で創設する。

講評

国際協力の重要性を使命感、対応圧力、自己利益という観点から説明し、日本が国際保健分野で主体的に提言し、貢献を深めるために、国際的に活躍できる人材輩出が必要であるというロジックが、説得力をもって語られた。

D班

発表要旨

企業とNGOによるBOPビジネスを通じた国際保健課題への持続的な取組みを目指し、それに沿った人材養成アクションプランを設計する。企業とNGO間の関係構築により、企業はNGOへの財政支援を行う代わりにNGOから現地の情報を得ることが可能であり、政府は双方のマッチング等を政策として支援する。

講評

国際保健課題の現状と、そのブレイクスルーとなり得るBOPビジネスの可能性の大きさ、そのための政府・企業・NGOがとるべきアクションプランが明確に説明された。

講師とメンターのご紹介

※講演順、敬称略

講師のご紹介

山崎 繭加	ハーバード・ビジネス・スクール 日本リサーチ・センター シニア・リサーチ・アソシエイト
坂野 嘉郎	JPモルガン証券株式会社
黒川 清	特定非営利活動法人 日本医療政策機構 代表理事
渋谷 健司	東京大学大学院 医学系研究科国際保健政策学教室 教授
清水 彩子	外務省 国際協力局 専門機関室 外務事務官 国際保健関係機関担当
谷口 和繁	世界銀行 駐日特別代表
石井 澄江	財団法人 家族計画国際協力財団（JOICFP） 常任理事・事務局長
Randall N. Hyer	Regional Director of Medical Affairs, Vaccines, Banyu Pharmaceutical Co., Ltd.
西本 麗	住友化学株式会社 執行役員 農業化学業務室アグロ事業部・国際アグロ事業部 ベクターコントロール事業部 担当
水野 達男	住友化学株式会社 ベクターコントロール事業部 事業部長
井上 肇	千葉県 健康福祉部理事
渡邊 学	独立行政法人 国際協力機構（JICA）人間開発部 保健第一グループ長
福元 満治	ペシャワール会 事務局長（広報担当理事）
荒木 光弥	株式会社国際開発ジャーナル社 代表取締役・主幹
沢田 貴志	特定非営利活動法人 シェア＝国際保健協力市民の会 副代表理事
西村智奈美	民主党 衆議院議員/外務大臣政務官
金田 晃一	武田薬品工業株式会社 コーポレート・コミュニケーション部 シニアマネジャー
金森 サヤ子	外務省 国際協力局 地球規模課題総括課 外務事務官
金平 直人	ソケット 代表
諏訪 理	独立行政法人　国際協力機構（JICA）気候変動対策室
平林 国彦	国際連合児童基金（UNICEF） 東京事務所代表
逢沢 一郎	自由民主党 衆議院議員
川田 龍平	みんなの党 参議院議員

メンターのご紹介

森 臨太郎	東京大学大学院 医学系研究科 国際保健政策学教室 准教授
伊藤 智朗	国立国際医療研究センター
木多村 知美	国立国際医療研究センター
小柳 愛	東京大学大学院 医学系研究科 国際保健政策学教室 助教
戸辺 誠	東京大学大学院 医学系研究科 国際保健政策学教室 博士
本郷 寛子	東京大学大学院 医学系研究科 国際地域保健学教室 研究生
村越 英治郎	特定非営利活動法人HANDS

参加者一覧

（五十音順、敬称略）

石黒 真美	東北大学大学院医学系研究科社会医学講座国際保健学分野、D2年
内田 暁	東京大学大学院公共政策大学院公共政策学専攻、M2年
岡野 恵	東北大学医学部医学研究科国際看護管理学教室、M1年
小澤 萌	宮崎大学医学部医学科、4年
北原 宏	筑波大学大学院人間総合科学研究科フロンティア医科学専攻・保健医療政策学研究室、M1年
熊澤 大輔	東京大学大学院公共政策学教育部、専門職学位2年
胡 安毅	杏林大学大学院在学中国際協力研究科医療協力専攻、1年
五嶋 佑輝	Grinnell College, IA, USAEconomics Major/Global Development Studies、大学2年
木場 宣宏	北海道大学医学部医学科、5年
桜井 桂子	東京大学大学院医学系研究科臨床疫学・経済学教室、D1年
佐々木 崇公	筑波大学大学院人間総合科学研究科フロンティア医科学専攻公衆衛生学コース、1年
佐藤 達哉	京都大学医学部医学科、6年
関口 卓哉	東京大学大学院理学系研究科構造生物学研究室、M2年
高島 響子	東京大学大学院医学系研究科公共健康医学専攻医療倫理学分野、専門職課程2年
張 劉喆	東京大学医学部医学科、6年
寺嶋 一裕	名古屋大学医学部医学科、6年
仲松 たくみ	名古屋大学医学系研究科看護学専攻基礎看護学講座、M1年
中村 文香	東京大学大学院医学系研究科国際保健政策専攻、M1年
仁井 勇佑	英国サセックス大学大学院国際教育開発学専攻、1年
西野 義崇	東京大学大学院医学系研究科 国際保健学専攻 国際保健政策学教室、博士後期課程1年
根木 沙良子	慶応義塾大学医学部、3年
長谷川 陽一	高知大学医学部医学科、6年
深津 幸紀	東京大学法科大学院、3年
堀田 幸	東京大学医学研究科国際保健政策学教室、研究生
森田 晃世	早稲田大学アジア太平洋研究科国際関係学専攻、M2年
横山 雄一	東京大学法学部政治コース、4年
吉川 真由	京都大学生命科学研究科統合生命科学専攻分子応答機構学、M2年

サマープログラムを終えて（参加者感想）

※五十音順、敬称略

石黒 真美
東北大学大学院 医学系研究科 社会医学講座 国際保健学分野 博士課程2年

“学ぶ喜び”
この8日間の感想を一言で述べるなら、「楽しかった」に尽きる。私自身、これまでの研究生活では出口がなかなか見えず、悶々とした日々を過ごしていた。しかし、このサマープログラムに参加させていただき、魂の根底から学ぶことの喜びがわきあがってくるのを感じた。ただ受動的に学ぶだけではなく、先生方やメンターの方々、参加者の方々のお話しや意見を聞くとともに、自分はどう考えるかを相手に伝えることで、また自分にフィードバックされる。この一連のやり取りが、学ぶことの楽しさを何倍にも増してくれたのだと思う。特にグループワークでは、みなが自分の意見を率直に伝え合いながら、最後までより良い発表にしようという姿勢で取り組むことができた。あくなき探究心を触発されたグループワークでの発言力の根底には、少なからず信頼関係が構築されていたこともまた事実である。今後、国際協力に携わる上で、自分の知識を存分に投資する上で発言力はとても大切だが、みなが相互に十分にその力を発揮できるようなより良い信頼関係を築くこともまた大事なことであると感じた。また、今回のサマープログラムでは、私自身が、国際保健や政策提言作成に係る理解度を明確にすることができた。今後は自分の弱みを強化し、スキルアップに励み、微力ながら国際社会に貢献していきたいと切に願っている。最後にこのような機会を与えてくださった日本医療政策機構の方々、先生方、そして共に学んだ参加者の皆様方に心から感謝申し上げたい。

内田 暁
東京大学大学院公共政策大学院 公共政策学専攻 M2年

“想いを伝えて、人を動かす。”
熱い想いがある。伝えたい。伝えることで、相手との距離を一歩でも近づけたい。そのためには、どうやって伝えればいいのだろうか。いくら考えても答えが出ない悩み。家族、恋人、友人、同僚、そして、利害を異にするライバル達などなど。誰と相対する時でも、人の心に湧く悩みであろう。私達のグループは、人として普遍的なこの悩みを、国際保健という一つの切り口から考えた。課題は「国際保健政策への支持を国民の中で広げるためにはどうやって伝えたらいいか。」であった。最終的に私は一つの確信を得た。それは、想いを伝えて人を動かすためには、論理と想いのどちらか一方でも欠けていてはいけない、ということである。中間発表において、論理に傾倒しすぎた中間発表を行なってしまったことがあった。その時、生の想いは伝わらなかった。その後、生の想いを伝えるために苦労した。仲間達が語るリアリティのある国際保健体験を発表に織り交ぜるか、という一点において私達は工夫した。空が突き抜けたと思わんばかりにまぶしい大空の下で、伝え方をグループ全体で考え上げていく素晴らしい一週間であった。

岡野 恵
東北大学 医学部 医学研究科 国際看護管理学教室 M1年

“大切なものを、目に見える形に”
何を持って、国際保健にコミットしていくか。それは、私にとって課題として残ったままだ。きっと、あの場にいたメンバーも、そうではないかと推測する。今まで、全体的な流れを俯瞰したことがなかった私は、今回のプログラムに参加し、新たな視点を得ることが出来た。そして、大学の先輩が、「自分の作った車輪が、途上国で人の命をつないでくれることに自分の気持ちを託したい」と言っていた言葉の意味がやっと理解できた。チームメイトにも恵まれ、人生で二度とない経験が出来たことは言うまでもないだろう。今回は、政策を作るという自分にとっては未踏の分野であったが、大切なものは、エビデンスを示し、世の中に発信していく必要があるということを改めて感じさせられた。大切なものを守るためには、目に見える形にしなくてはならない。利益という魅力を掲げ、世界の福祉のために多くの人が巻き込むシステム作りは、私の一生の課題だ。
東京から帰ってから、ここ数日間、自分自身さまざまな思いが胸をよぎっていた。乳児院でのボランティアをしながら、日本にも恵まれないと思われがちな子供たちが少なくないことを目の当たりにする。世界の問題を、身近に感じてもらうということは、我々にとって非常に複雑かつ、難しい問題である。なぜならば、全ての人が自律的に生活しているわけではなく、自由をみすみす放棄している人も少なくないからだ。きっと、自分勝手な人間は、自分の自由が奪われたとき、初めてその大切さに気付くものなのだろう。自由は当たり前すぎて普段は感じることがないのだろう。我々が国際保健に興味を持つようになってきたのは、さもすると、自由を奪われることが少なくない社会になったからではないか、と私見を述べる。理不尽なことがまかり通ってしまう世の中だ。だからこそ、人の「権利」についてより深く考えるようになる機会が増えたと考えるのは、理想論すぎるのだろうか。何を持って正しいというかは、それぞれの「正義」にかかっている。しかし、その正義を形作るものは道徳心であり、道徳心の善悪を定めるものは、その道徳心への動機であるとイマニュエルカントは説く。各々が持つ動機は、個人に依存する限り、正しさに関する絶対性は定義できないのではなかろうか。

サマープログラムを終えて（参加者感想）

※五十音順、敬称略

小澤 萌
宮崎大学 医学部医学科 4年

“現場と政策提言の場”
私は国際保健医療の現場を志し医学部に再入学したが、国際保健の世界を知れば知るほど、医療者ができることは少なく、多分野の知識・経験の連携、総合が何より不可欠であることを実感するばかりだった。果たして将来自分はいかなる立場で国際保健に関われるのか、そして、政策提言の場における現在の問題点、また医療者がそこでいかに貢献できるのかを知るために参加させていただくこととなった。当プログラムでは、コンサルタント、行政、国際機関、企業、国内外で活動するNGOsという国際保健政策に関わるほとんどすべての分野の専門家からの講義を受講させていただき、本当に多様な視点からの学びを得た。私にとって大きな影響となったのは、現場で感じる「目の前の子どもを救いたい」とか「この笑顔を守りたい」といったヒューマニズムを政策提言の場に持ち込むのが決してタブーではない、ということだった。「守るべきいのちを、守る」という当たり前のことをモチベーションに国際保健の政策提言に取り組んでよいと感じたとき、安心を覚えた。また、それとは逆に国際保健の向上が、将来の日本、先進国にとって経済的にも国益となる点を強調する動きがあるというのは新たな学びであり、刺激的だった。そして何より収穫となったのが、当プログラムの参加者の皆さんと熱い意見交換を行えたことである。経験も専門もバラバラなメンバーと意見を交わすこと、それを受け容れることの難しさ・楽しさを目一杯感じることができた。自分の弱点も浮き彫りとなり、これから成長する糧にしたいと思う。このような素晴らしい機会を作ってくださった関係者の皆様、本当にありがとうございました。

北原 宏
筑波大学大学院 人間総合科学研究科フロンティア医科学専攻・保健医療政策学研究室 M1年

"タカラモノ"
セミナー参加前に、「医療」についてより深く理解することを通じて、思考の枠組みを形成し、それらを基に自分の進路を考えられるようになることを目標と決めた。講義では様々なジャンルでご活躍されている講師のお話を直接伺うことで、現場で何が起こっているかを知ることが出来た。それらの知識をもとにグループワークにおいて、政府の方針を考慮に入れながら、各ステークホルダーからの視点で物事を考え、さらに参加者各自の意見を調整する、このような状況を通じて「医療」を様々な角度から考えることができるようになった。
今回の経験は自分のキャリアパスを考える上で、大変示唆に富むものであった。数年後仕事をしてる自分が、とても魅力的であるようにこれからも日々精進していきたいと思う。全ての過程がかけがえのない財産であり、このような場を設けて下さった全ての方々に大変感謝している。

熊澤 大輔
東京大学大学院 公共政策学教育部 専門職学位2年

“マルチステークホルダーの存在を学び、感じた8日間”
世界のために、何ができるか。この8日間、参加者の誰もが、抱いた思いではないだろうか。私にとっては、さらに日本のため、地域のため、そして自分のために何をなすべきか、何ができるのかを自問した日々でもあった。何が、このような思いを強めさせたのであろうか。多様なフィールドで活躍する講師の方々の講義にふれる中で、さまざまな人々が国際保健分野に関わっていることを感じたことはもちろん、参加者もまた、同じ国際保健に関心のある学生といっても国際保健の現場の目線に強い思いを抱く学生から政策的なレベルの貢献を考える学生まで多様であったことも大きいと思う。講師陣、参加者さらにはメンターの方々を含め、国際保健とは多様なアクターの存在によって日々変化している分野であるということを感じることができた。今回のセミナーを通して、多くのステークホルダーの利害を汲み取り、ステークホルダー毎の役割とその連携を模索することの意義を感じることができたとも言える。多様なアクターの協働による国際保健政策の展開を今後も検討しつつ、世界のために何ができるかを絶えず自問していきたい。これが、本プログラムで学んだ大きな財産ともいえよう。

胡 安毅
杏林大学大学院 国際協力研究科医療協力専攻 1年

“The situation and future of health policy making in Japan”
Before I came to Japan I am always asked why you study in Japan and actually I would give some answers like the tech and science of Japan is excellent, bla bla bla. But since I came to Japan I was always thinking about going to the U.S. U.S is the best and I am the best, so I want to go to U.S. But as I lived in Japan for a long time I realized Japan is a better place than U.S if I want to learn something especially economy and politic in that the road of developing of Japan is nearly the same as China so from study it maybe I can predict the future of China. That‘s why I dropped out the lab work and got into the social work which means job. And now I am back to the school again to study further in the filed of global health and hope to do something in the healthcare business or adviser in the near future. And after this program I have learned the situation in the global health policy of Japan which is as bad as its economy developing. Surly it is better than China but compare to the economy scale of Japan (of course I mean the GDP per capita) it is so hopeless (as the economy of Japan will develop very slowly in the future). And I was surprised the gap of the Japanese staff in WHO is so large and the applicant to this program are so little. In china a program like this will always get the application nearly 200 or more, of course the population in china would be much more than Japan but the ratio of Chinese college students and Japanese college students maybe slower. It again proves one thing that Japanese are not interested in the global compare to the Chinese. Surly the American are much more uninterested in the global). But Japan is a little country without any natural resource, and now the world has become a multiply stakeholder world so Japan cannot get the resource easily like the post-WWII. Japan need to be more involved in the International affairs. The future of global health is also very hopeless. If Japan really wants to become a global stakeholder Japan needs to do better for the foreigners especially the immigration bureau and the Court. I always believe that a society without foreigners cannot be a global society. And a country without global society will not have a large number of global talent persons. A child who grows up in a community which is full of foreigners surly will get interested in the global as he/she communicate with foreigners so often in the community. But I cannot see any signal that Japanese government will improve the situation of foreigners in the near future. So maybe without respect but straightly saying that whatever Professor Shibuya to do to increase the number of Japanese WHO staff it will be useless. But thanks very much to give me a chance to attend this excellent program.

五嶋 佑輝
Grinnell College, IA, USA, Economics Major/Global Development Studies 大学2年

“Divergent Reasoningの重要性”
外務省、世界銀行、JICA、UNICEF、現地や日本国内で活動しているNGOまたは私企業などの方々からのレクチャーを聴くことにより、それぞれの組織にとって国際保健などのサポートとその過程が誰にどのような事を導くために行っているのかを学んだ。行動を起こす動機には、疾病から守られて育つ環境や社会が発展途上国の住居地にない子どもたちのためにというのが一般的に目立つ事ではあるが、他の先進国の経済発展や企業の利益を目的の中心としているのが主流である。その中で皆の利益や動機を保ちつつ発展途上国へのサポートをするために日本政府が動くのは非常に難しい。政策提言を作るグループ内にも同様の難しさはあった。たとえ途上国の子どもや妊婦に整った医療を備える事が同じ目標であっても、それの実行に適していると考える方法は違う専門分野を学んだ人同士では同意しにくいのである。これは政治上にあるMajorityとMinorityと同じ事と考えられる。私たちが意識すべき事は、途上国現地からの考えを重要視すると共に、様々な観点からの考えを認め、それらを取り組み繋げる事である。

木場 宣宏
北海道大学 医学部医学科 5年

“マルチステークホルダーの意味”
今回のサマープログラムにおいて、一番大きかったものは議論の難しさである。何を当たり前の事をと思われるかもしれないが、国際保健に関する課題を主に国際保健にかかわってきた者のみで話し合った経験しかない自分にとっては新鮮なものであった。これからの国際保健は、様々な利害関係者を巻き込み、外交戦略としての意味合いも強くなり、複雑化、難化していくであろう。そのような中で、サマープログラムによって、共通のバックグラウンドを持たない人間が話しあうためのスキルと、話し合うための場の重要性を早くから認識できたのは大変有意義であった。近頃、人脈力という言葉を聞くが、連絡先ぐらいならば簡単に手に入るこの時代において、どれだけ会って深い時間を過ごしたかが意味を持つ。短い時間ながらも、徹夜までして国際保健の将来について考えた仲間はそれぞれのマルチステークホルダーの代表者となり、将来の国際保健を作るに必要不可欠な繋がりになるだろう。

桜井 桂子
東京大学大学院 医学系研究科臨床疫学・経済学教室 博士課程1年

“仲間、そして原点”
まず、今回、本当に素晴らしい講師陣、参加者と共に楽しく、濃密な時間を過ごせたことに感謝したい。国際保健の概要と、今後の方向性への示唆に富んだご講義の後、学生からの問いかけに、講師の先生方が丁寧に、心からお応えいただいたことに感動した。また、政策立案の際のグループディスカッションでは、違った専門性を持つ学生たちが、特徴を出し合い、パズルを埋めるように物を作っていくことの心地よさを経験した。本当に素晴らしい仲間と機会を得たと思う。また、8日間を通して、再び原点（健康の分野で社会に貢献しようという熱意）の大切さを知った。研究分野に身を置き、いつの間にか他人より1つでも多くの業績を上げることが目標となり、苦しくなっていたことに気づかされた。今後への示唆をいただいた。このようなかけがえのない時間を提供くださったスタッフの皆様に心からお礼を申したい。また、将来、ここで出会った方々と同じ場で仕事ができたら光栄だと思う。

佐々木 崇公
筑波大学大学院 人間総合科学研究科フロンティア医科学専攻公衆衛生学コース
保健医療政策教室 1年

“国際保健への理解を深められた夏”
国際保健政策サマープログラムの8日間はあっという間だった。普段の大学の授業では受けられないような様々な組織や立場の講師陣によるレクチャーは今までの私が持っていなかった国際保健に対する視点を与えてくれた。現在の国際保健のキーワードとして、「マルチステイクホルダー」があげられるが、国際保健に関する政策をたてる際は、国際機関や外務省や厚生省などの国家でのマクロな視点、またJICAやNGOにおけるミクロでの視点のどちらもが必要である。現在の国際保健は「Tropical Medicine」でもなく、「International Health」でもなく、「Global Health」である。国境の向こうの“彼ら”の問題でなく、“我々”の問題であるということを理解することは、国際保健を考える際にとても大事な視点であると思った。グループワークで様々なバックグラウンドを持つメンバーと議論を重ね、ひとつの政策を作り上げることを成し遂げたことは今後の私の人生において大きな財産になると思う。

佐藤 達哉
京都大学 医学部医学科 6年

“私の中に生まれた変化”
私が今回プログラムに参加したのは、自分の中で漠然とした関心の対象であった国際保健に関わる意義を、人に説明出来るようになりたかったからなのだと、今振り返って思う。プログラムを終えて、日本人として国際保健に関わる意義の理解、実際に国際保健の分野で仕事をしたいという気持ちは明確になり、それを誰に対しても説明出来るようになったと感じる。さらに、このプログラムは私にとって、単に国際保健について学ぶ場ではなかった。自分の考えを事実に基づいてひっくり返されるということを、この8日間ほど多く経験したことはなかった。何気ない自分の前提が確かか立ち止まって考えること、事実に基づいて考えを進めることの重要性を、身をもって学んだ貴重な機会となった。最後になりましたが、このプログラムを作り、支えて頂いた日本医療政策機構の皆様、東京大学大学院医学系研究科国際保健政策学教室の皆様、メンターの皆様、講師の皆様に心よりお礼申し上げます。本当に、素晴らしい時間をありがとうございました。

関口 卓哉
東京大学大学院 理学系研究科 構造生物学研究室 M2年

“国際保健のリアリティー”
国際保健は効率的なinvestment、既存の枠組みにとらわれない、日本のシーズを生かしたbottom 1 billion以外に対する国際保健政策、アドボカシーと政策実行の関係性、海外青年協力隊員とのゴールイン・・・。今回のプログラムでは国際保健政策実行の為の、モチベーションの異なる多くのステークホルダーの関係性に配慮したリアリティーのある政策立案の考え方や実態を網羅的に学ぶことができたと思う。また、グループ内での強烈なチームメンバー達との、あるいはレクチャー中での積極的なディスカッションを通じて、互いの知見やロジックをリリースしあう姿勢そのものが大変刺激的であり、そうした意味でも現場のリアリティーを多少とも感じることができた。とりわけアイディアに対する潔い取捨選択、メンバーの巧みなファシリテーションのが印象的であった。研究室での実験との掛け持ちでの参加になってしまい、メンバーをはじめ皆様にはご迷惑をおかけすることも多々あったが、プログラムに参加でき大変よかった。8日間ありがとう。

高島 響子
東京大学大学院 医学系研究科公共健康医学専攻医療倫理学分野 専門職課程2年

“現実と理想／「世界へ飛び出せ」”
国際保健初心者の私でも、現在のglobal healthの潮流や日本の状況を、国際機関・日本政府・現場で活躍する方といった錚々たる講師陣の、様々な視点から学ぶことができ、大変勉強になった。また参加者も実に多様なバックグラウンドで、多くの方の“生き様”そのものに触れることができたのが、最大の学びだったように思う。グループワークでは、全員で共通理解を達成することの難しさを知り、また分析的に現状を見つめるのと同時に理想や目標へ向かって解決策を皆で探ることの大切さも学んだ。他方、講義で印象に残っているのは、ほとんどの講師の方が“世界へ飛び出せ”とおっしゃったことだ。日本を飛び出し、世界を自分の目で見ること、同時に日本を外から見ること、その経験が何よりも必要だと、これだけ多くの国際保健の最前線で活躍する先生方がおっしゃったことは、私の今後を考える上で大きな刺激となった。参加する機会をいただけて、心より感謝している。

張 劉詰
東京大学 医学部医学科 6年

“戦友、問題意識、そしてロールモデル”
このプログラムで得たものはあまりに多く、とても数ページでは纏め切れないが、あえてこの三点を挙げる。まず、参加した学生の顔ぶれや背景が実に多種多様で面白く、ともすれば均質化しがちな勉強会とは異なる大変刺激的な環境だった。医学生・医療関係者から、国内外の大学・大学院で政策ないし関連する領域を学んでいる者、更には豊富な海外（特に途上国）経験のあるベテラン(?)まで。短期間ではあれど、お互いへ及ぼした影響はとても大きなものであったと思う。自分の背景や能力が、この中でどう貢献できるのかを常に考えさせられた。多くの分野の第一線で活躍なさっている方々からレクチャーを受けた。知識そのものは時には文献からでも得られるが、その裏にある本人達の熱意が、問題意識が、言葉の端々から感じられたのは生での体験ならではのものだろう。実際に取り組んでいる方の顔が見えることで、その課題に対する自身の向き合い方が変わる体験をした。国際保健の課題が自分の日常の一部になった。明確なロールモデルが描きやすいとは言いづらいこの分野で、様々な角度で取り組んでいる方々と交流できたことは、少なくとも目の当たりに出来たことは、僕にとって大きな収穫であった。次の一歩を踏み出す方角はどちらか、そのヒントを貰った。

寺嶋 一裕
名古屋大学 医学部医学科 6年

“人と人とが織り成す物語”
自分は人が笑っているのが好きだ。それが故に医者を志し、今は国際医療にも携わりたいと考え、このプログラムに参加した。プログラムは個人的な事情で途中までしか参加できなかったが、非常に刺激的であった。多くの人に出会い、知識だけでなく、価値観や考え方、その人の生き甲斐、いや人生そのものに触れることができたと思う。なぜ国際医療に関わるのか？という問いは、なぜ人を幸せにしたいのか？という問いと自分の中でほぼ同義である。人を幸せにするという志のもとで、その手段の一つが国際医療であるというだけだからだ。その答えは出ないが、多くの人に触れ、また一つ自分は前に進めたと思う。人は不完全で、弱く、欲もある。それでも自分はそれも含めて人を大事にしていきたい。人が人として成長するには人からしか学び得ない、ということを実感できるプログラムであった。人としてどうあるべきか常に考えながら、今回出会えた大先輩方と同輩に恥じぬよう精進していきたい。

仲松 たくみ
名古屋大学 医学系研究科看護学専攻基礎看護学講座 博士前期課程（M1年）

“Global Healthの今後を見据えて”
本プログラムでは「国際保健」という普段日常で生活している限りではほぼ全く触れる機会のないテーマについてとことん考え、政策提言を様々なバックグラウンドを持つ仲間と模索するというまたとない素晴らしい機会であった。「国際保健」に限らず、いわゆる国際協力関係の話題が出るたびに、常に交わされる議論として、「なぜ国内でも大変なのに日本でなければならないのか？」「global healthよりもまず日本の医療に取り組むべきでは？」といった意見に対し、私は今までこれといった意見の提示が出来ず、自分自身でも迷うことが多々あった。しかしこのサマープログラムで実に多くの講師・mentorの先生方、そして多彩なバックグラウンドを持つこれからの将来を見据えた学生参加者の皆様方から、この問いに対する様々な意見を拝聴し、今後の私自身の大きな糧にできたことが、何よりの収穫であった。今後も本プログラムの先生方、参加者一人ひとりがそれぞれの人生を見据えてGlobal Healthを軸に活躍されていく中で、どこかで人生の瞬間が交錯する機会があることを期待しながら、私自身努力していきたいと思う。最後になりましたが、大変お世話になった日本医療政策機構の皆様方に厚く御礼申し上げます。

中村 文香
東京大学大学院 医学系研究科国際保健政策専攻 M1年

“様々な視点からのGlobal Health”
今まで私の中には国際保健とは純粋に「発展途上国や格差などから病気で困っている人の為のもの」であるべきだという思いがあり、「援助による国益」や「企業の利益」などという考え方には目をそむけてきたように思う。しかしながらこのプログラムに参加し、そういった利益や思惑といわれるような思いについても真正面から向かい、考えたことで、様々な思いがあってこそ、国際保健であり、大切なのは様々な視点から国際保健を見られることなのかもしれないと思うようになった。
支援する側の視点だけで物事を考えていては、被援助側にとって本当に必要なものは届けられないだろうし、被援助側だけの視点では、継続的かつ現実的な支援は不可能であろう。多くの視点が交錯する国際保健というフィールドで、いかに様々な視点からGlobal Healthを捉えていけるかが、今後の私の課題だと感じており、様々な視点をもった先生方の意見を伺い、仲間たちと議論ができたことは私にとって宝となる経験でした。

仁井 勇佑
英国サセックス大学大学院 国際教育開発学専攻 1年

“新たな視点と仲間を得た8日間”
国際保健とは何か、から始まったサマープログラム。政府、NGOなど、国内外の政策と草の根レベルの現状を知る関係者の講義を通じ、国際保健と言っても、その意味が一様ではないことに気付かされた。また、問題解決の手法は必ずしも保健だけではなく、教育やインフラなど別の切り口からも現状を分析し、最適な解決方法を発見する力が必要であることを学んだ。これらを踏まえ、私たちの班は世界でも通用する人材を輩出するには何が必要かについて毎日熱い議論を交わし、リサーチを重ねた。結果、情報共有、ネットワーク作りの場が十分でないことが問題であるが、国際保健に対する国民の理解が不十分であることも、人材が育たない大きな原因の一つであると結論づけた。教育を専門とする私にとっての収穫は、国際保健の理解を深めたことは勿論、教育だけに従事していては絶対に知り合えなかったであろう保健・医療関係者との出会いである。貴重な学びとネットワーキングの機会を提供し、準備段階から東奔西走された医療政策機構のスタッフの皆様に、心から感謝している。

西野 義崇
東京大学大学院 医学系研究科 国際保健学専攻 国際保健政策学教室 博士後期課程1年

“世界の中で「日本のプレゼンス」を追い求めることは必要か？”
厳しい経済事情の中、世界の中で日本のプレゼンスは弱まっている。日本の企業・技術は果たして今後、国際競争力を維持し得るか？その事に対する危機感は参加学生からも伝わってくる。しかし、私が思うに、均衡へ向けての調整期間に摩擦的コストが発生するとしても、最終的に国際社会が比較優位に基づく均衡に向かうのはごく自然なことではないか？（「比較優位」は「絶対優位」とは同じではないということも強調しておく。）一方で、ここに集まった心から尊敬すべき仲間たちが「良い事をするのは善い事である」と断言する時、私は希望を感じる。なぜならば（確かに、昨今の日本の「内向き志向」は問題だが）真に国際社会に対し役立とうとすれば、単に「やりたい」ことではなく、「できる」ことを冷静に分析せざるを得ず、それが有効に働けば必然的に利益と名声はそれに続くからである。しかし、途上国の現状を見て、「何を」なすべきか、それが分かれば、皆がこんなに苦労はしない、ということはひしひしと伝わって来る。座学も大事だが、改めて、現場を自分の目で確かめてみたい、という思いを強くした。

根木 沙良子
慶應義塾大学 医学部 3年

“伝える気持ち”
今回のサマープログラムの最終目標として、私たちの班ではアドボカシー活動についての政策提言を行った。つまり「周りにいかにして伝え・心を動かすことができるか」、ということなのだが、これはサマープログラムを通じて私が最も難しいと感じた点でもあった。同じ1つのテーマについて考えているはずなのに、こんなにもアプローチや考え方が違うものかと驚かされ、そして自分の意見が相手に理解してもらえているのだろうかと不安にもなった。私はもともとチーム医療に関心があるので、「1人の患者さん・症例に対して多職種が協働しあう時も、きっと同じことを感じるのだろうなぁ」と思ったりもした。どんな職種でも今後この悩みは尽きないのだろうが、「要は、『伝える気持ち』だから」という山崎さんのお言葉に少しヒントをいただいた気がした。どうしたら理解してもらえるか・説き伏せられるか、ではなく、まずは自分の中でしっかりと「伝える気持ち」を持つこと、そして伝えたい事に対してpassionを持ち続けることを、常に忘れずにいたいと強く感じた。

長谷川　陽一
高知大学　医学部医学科　6年

“Why Global Health?”
周りの同級生が採用試験・卒業試験の準備に勤しむ中で、参加するかどうか直前まで悩みながら申し込みをした今回のサマープログラムでしたが、本当に参加して良かったと思っています。与えられた課題に対してすぐアクションを考えるのではなく、何よりも前提条件を疑い「Why Global Health？」という問いを自らに投げかけ、問題を分解して本質にできる限り迫り、いつもと違った視点から物事を捉えることをグループ全体で意識し続けた8日間でした。また、国際保健政策というテーマのもと、集まった参加者のバックグランドは実に多種多様で、考え方も様々で、そういった中でコンセンサスを作りながら議論を進めていく過程は実に刺激的でした。今回お会いした方々と、いつかどこかで仕事ができるのを非常に楽しみにしています。また、どこかで会いましょう！最後になりましたが、今回お世話になった先生方、スタッフの方々本当にありがとうございました！

深津　幸紀
東京大学　法科大学院　3年

“危機感”
本プログラムで扱った主要なテーマは『国際保健』であったが、そこから得たものは国際保健に関する知識だけではない。国際保健というトピックを通して、いかに日本がまずい状況にあるのかを認識した。もちろん、世界各国は各々に問題を抱えていてそれらに比べれば日本はマシだという見方もあろう。だが、私が強調したいことは僕を含めた若者が、日本の抱える問題に危機感を持っていないということに対する危惧である。一度経済成長を遂げてしまった日本の若者は、以前の若者が持っていたようなハングリー精神を持てない。ここに問題点がある。本プログラムは『国際保健』や『環境』という軸を通して日本の若者にもう一度目標を与えようという試みであったようにも思う。そして、それはある部分では成功し、知識や考え方を身につけさせることには成功したはずだ。しかし、その一方で、持続的に努力を続けるための野心やハングリー精神は日本人の若者には失われたままである。それが私の認識だ。中国人や欧米人に能力で劣っているとは決して思わない。だが、日本の若者が失ってしまった『気持ち』や『情熱』が最後の最後で日本の在り方に落とし穴を作ってしまう。そんな予感を与える8日間であった。

堀田　幸
東京大学 医学研究科国際保健政策学教室 研究生

“政策提言作成から得たもの”
本プログラムの魅力は、グローバルヘルスの第1線で活躍されている経験豊富な教師陣・メンターの先生方と様々なバックグラウンドを持つ学生が真剣に議論し、一つの課題に取り組むことにあると思う。今、グローバルヘルスの現場では何が課題となっているのかを分析し、ロジカルに解決策を提案していく、その過程で物事を鳥瞰的に見ることの重要性を学んだ。政策提言のアウトラインを学ぶだけでなく、実際に提言書を作成し、議員の方にプレゼンテーションを行う中で、いかに社会にインパクトがあり、かつ実行可能であるかを考えることが大切と感じた。また、キャリアナイトでは、グローバルに活躍されている先輩方の経験を伺い、今後、自分のキャリアをどのように構築していけば良いかを真剣に考える機会となった。何より、グローバルヘルスを目指す方々と議論し、一つのものを作り上げていく過程は、本当に楽しかった。

森田 晃世
早稲田大学 アジア太平洋研究科国際関係学専攻 M2年

“イノベーションは多様性から”
プログラム参加前、私はそれぞれの参加者が国際・保健・政策の中で一つの分野での専門知識があることが重要だと考えていた。しかし、それは大きな勘違いだった。国際保健政策における議論で必要なことは専門知識ではなく、バックグラウンドが違う仲間の意見において違う部分を楽しみ、共通な部分を嬉しいと感じる心だ。専門が違う学生と初対面で議論を始めることは、言語が異なる外国人と話す感覚に近い。初めは相手との共通点を探すのに苦労する。一日目、二日目の議論では自己紹介やその日の感想などを通じて仲間を知ることに集中していた。その後、何十時間も議論を重ねることで、共通点を探す思考から自分と異なる意見を探す思考になった。レクチャーの中で繰り返された「イノベーション」は多様性の中で自分との違いを楽しむ姿勢の中で生まれるのではないかと思う。知識でも人でも昨日まで知らなかったことを今日知る喜びを教えていただき本当にありがとうございました。

横山 雄一
東京大学 法学部政治コース 4年

“Diving into the World of Global Health”
プログラム前日に帰国し、初めて他の参加者の方々の自己紹介欄を読んだ。目が点になった。保健分野の知識も経験もない学部生は僕しかいなかった。551ページある『Basch国際保健学講座』を読み始める。でも、時差ボケで何も頭に入らない。僕の国際保健政策サマープログラムはこうしてはじまった。今思うと「国際保健」という看板に必要以上にビビっていたことがよく分かる。一口に「国際保健」とはいえ様々な人が様々な立場から関わっていた。「医学の知識がないからといって怖気づくことはありません。」ある先生は僕の気持を見透かすように言った。国際保健の分野には入っていけそうだ。でも、ここで僕には何ができるのか。僕にとって救いだったのは、別の先生の一言だった。「いまや国際保健には政治・外交の専門家の関与が欠かせません。」プログラムの終わった今、僕は自分が関心を持つ外交というフィールドからこの分野に関心を持ち続けていこうと決意している。「国際保健」に関心を持っている方へ。知識や経験がなくても、このプログラムが国際保健への扉を開いてくれると思いますよ。

吉川 真由
京都大学 生命科学研究科 統合生命科学専攻 分子応答機構学 M2年

“人生を多重化する大切さ”
キャリアナイトで金平直人さん（特定非営利活動法人ソケット代表）がおっしゃった『人生を多重化する』という言葉が心に大きく響いた。実はこの国際保健政策サマープログラムに参加した当初、キャリアについて迷いの中に居た。現在行っている基礎研究と、いつか叶えたい国際貢献という夢をどうにか繋ぐ一本道を探していた。しかし「一途に夢を追いかける」ことが美しい姿だと思い込んでいたため、知らぬ間に視野を狭めていたのかも知れない。この度、プログラムで講師の先生方からお話を聞き、国際保健政策一つとっても様々な人々が異なる考えを持ち取り組んでいることに驚かされた。更に、その人々のキャリアパスを見ても、非常に『多重化された人生』を歩んでいらっしゃり、それゆえに見えてきたことも多いのだと気づかされた。本業に埋もれず、やりたい事を諦めず、違う分野に足を踏み入れることも大切である。講師の先生方、参加者、メンターの方々、スタッフの皆さんなど、心から尊敬できる人たちに出会えたことはかけがえが無い。明日からどうやって人生を多重化させようか。このプログラムでは何よりも生き方を学んだ気がする。このような機会を与えてくださった皆様に心から感謝している。

©特定非営利活動法人 日本医療政策機構

日本医療政策機構
Health Policy Institute, Japan

〒100-0014　東京都千代田区永田町1-11-28 7階
TEL 03-5511-8521　FAX 03-5511-8523
URL:　www.healthpolicy-institute.org
E-mail:　info@healthpolicy-institute.org

東京大学
THE UNIVERSITY OF TOKYO